万延元年遣米使節随行艦咸臨丸艦長勝海舟渡米記録の諸写本について

和田 勤*

はじめに

勝海舟の渡米の際の記録は、『海軍歴史』の一部として収録されている。その基礎となった海舟の記録は数種類存在するが、現在の所それらをまとめた研究が存在しない。そのため『海軍歴史』に収録されるまでの、海舟の渡米記録諸本について考察する。

講談社から刊行されている『勝海舟全集』[1]には、別巻の「文書・著述・文献一覧」の「海軍歴史」の項目において、海舟の渡米記録についての各図書館や研究所などの所蔵状況が記載されている。他にも、「東大史料編纂所所蔵勝家本写本二種のうち「勝義邦航米日記」と題簽を付された草稿（扉には「掌記 二」とも）は当然のことながら私的色彩が濃く、公的記録の形に改稿された他の数種航米日記（「海軍歴史」所収も含め）では陰をひそめるトラブルや私的感情・病状などの記述が残っていて興味深い」との記述がある[2]。しかしながら、その詳細について、例えば諸本の内容はどういったものであるのか、違いがあるのであれば具体的にはどの様に違うのか、写本の系統はどの様になっているのか、といった考察まではなされていない。

他にも海舟関係史料の先行研究として、櫛野義明「勝海舟関係資料を整理する」（一）～（三）[3]がある。しかし、渡米記録については、各種写本の系統の考察などはなされていない。

上記を踏まえて、海舟の渡米記録諸本について、その系統を明確にすることを目的として考察する。またこれらの中で重要と考えられるものはどれであるのか、講談社版『勝海舟全集』の「文書・著述・文献一覧」に記載されている内容の根拠についても合せて考察し、海舟研究上、今回の研究がどのような意義があるのか検討したい。

Ⅰ 「掌記 二」から『海軍歴史』までの各写本

まず挙げられるのは、海舟自筆の渡米について記されている日記手帳の「掌記 二」である[4]。なお、参考として「図 海舟渡米記録諸写本の系統図」を作成し、海舟の渡米記録諸本には便宜上、各史料に番号を付ける。そのため当史料は①とする。「掌記

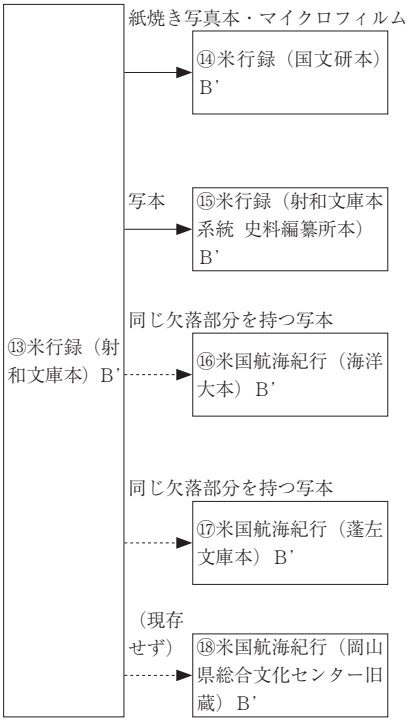
二」は大田区立勝海舟記念館（以下、勝海舟記念館と表記する）に所蔵されている。[5] 現在閲覧は不可の状態にある。

この「掌記　二」は、写本が作成されている。現在確認されているのは、一つは東京大学史料編纂所（以下、史料編纂所と表記する）所蔵の「勝義邦航米日記」である。[6] 当史料は、便宜上「掌記　二（史料編纂所本）」と呼称し、②とする。当史料の写本作成者は不明であるが、「維新史料編纂会」の罫紙が使用され、同会の印が押印されている。また、「勝精家文書」との説明がある。勝精は徳川慶喜の一〇男であり、海舟没後に勝伯爵家を継いだ人物である。内題に「掌記　二」とあることから、「掌記　二」を写したものと考えられる。

もう一つは、慶應義塾大学メディアセンター（以下、慶応大学と表記する）所蔵の「航海日記／勝麟太郎［勝海舟］手記　掌記」である。[7] 当史料は、便宜上「掌記　二（慶応大本）」と呼称し、③とする。史料検討の結果、当史料は表紙に「掌記二　航海日記」とあり、これも勝海舟記念館に所蔵されている「掌記　二」を写したものと考えられる。

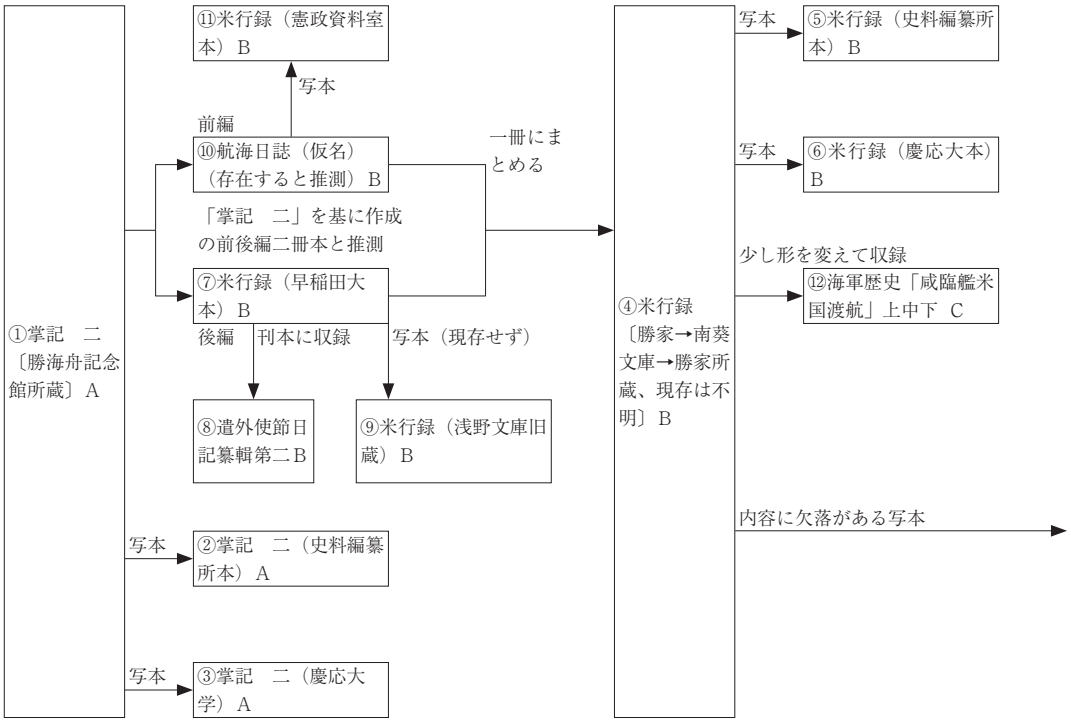
文倉平次郎『幕末軍艦咸臨丸』には、咸臨丸渡米の史料として、「航海日記　咸臨丸艦長勝安房は先づ掌記を草し、更に敷衍して航海日記を認めて居る、勝伯爵家に蔵す」とある。[8] この航海日記を便宜上④とする。当史料は写本が数種類作成されている。現在確認されているのは、一つは、史料編纂所所蔵の「勝海舟米行録」である。[9] これも勝精家に伝来した史料である。当史料は、便宜上「米行録（史料編纂所本）」と呼称し、⑤とする。もう一つは、慶応大学所蔵の「米行録」である。[10] 当史料は便宜上「米行録（慶応大本）」と呼称し、⑥とする。

それでは、写本の名称から、この航海日記の名称について考察する。史料編纂所と慶応大学の両写本共に、「米行録」という名称が一致する。慶応大学の写本は大正四年（一九一五年）作成で、後書きには南葵文庫所蔵のものを使用したとある。南葵文庫から勝家に史料が返還されたのは大正一三年（一九二四年）であり、史料編纂所の写本は大正一五年（一九二六年）に作成されている。そのためこの写本は両方ともに元々は勝家にあった史料から作成されたものとなる。更に、昭和三年（一九二八年）に、清明文庫にて開催された展覧会の目録である『海軍史料展覧会陳列目録　大礼奉祝』には、勝精所蔵の「米行録」が展示されてい



・・・正式名称）
料館

図 海舟渡米記録諸写本の系統図
〔〕は所蔵機関名



出典 ・大塚武松編『遣外使節日記纂輯第二』日本史籍協会、一九二九年
・勝海舟全集刊行会編『勝海舟全集』講談社、一九七二～一九九四年
・『国書総目録』（新日本古典籍総合データベースにてネット閲覧可能）
https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/kokusho.html

所蔵機関名の正式名称（略称
・国文研・・・国文学研究資
・海洋大・・・東京海洋大学

る。これらの事実を踏まえて、④の番号を付けた航海日記自体の名称は「米行録」であると考えられる。

「米行録」の作成について考察する。まず、「掌記 二」は私的な内容も含まれる手記である。海舟の渡米は公務出張に該当するため、「掌記 二」を基にして復命書もしくは復命書に添付する資料として「米行録」を作成した可能性がある。[11] 海舟本人の作成した「米行録」の所在は現在不明である。なお、「米行録」を海舟が幕府に提出したかは、現在のところ不明である。

早稲田大学図書館（以下、早稲田大学と表記する）には「義邦先生航海日誌別録」という史料がある。[12] これは海舟の自筆史料であり、所々に訂正の跡がある。当史料については、『海舟日記』文久二年九月二六日条に「予が航海別録」[13]との記述があり、この時期までには「義邦先生航海日誌別録」は作成されていることがわかる。この写本を、便宜上「米行録（早稲田大本）」と呼称し、⑦とする。[14]「米行録（早稲田大本）」は、大塚武松編『遣外使節日記纂輯第二』に収録され活字化されている。[15] 当史料は⑧とする。

広島市立中央図書館の前身である浅野文庫には、かつて海舟の「航海日記」という写本が所蔵されて

いた。しかしこの「航海日記」は、戦災等で焼失または所在不明になったと『国書総目録』に記載がある。[16] 内容としては、活字版が『遣外使節日記纂輯第二』にあると記されている。このことから「義邦先生航海日記別録」の写本と考えられる。当史料は便宜上「米行録（浅野文庫旧蔵）」と呼称し、⑨とする。

「米行録（早稲田大本）」の内容は、「米行録」の後半部に相当する。ここから推測すると、「掌記　二」から「米行録」が作成される過程で、草稿としてこの「米行録（早稲田大本）」と、現在その存在は確認されていないが「米行録」の前半部に相当する海舟自筆の史料が存在し、この二冊を合わせたものが「米行録」であると推測される。当史料の名称を「航海日誌（仮名）」とし、⑩とする。[17]

国立国会図書館憲政資料室（以下、憲政資料室と表記する）には、「米行録」の前半部に相当する写本の「勝氏米行紀事」が所蔵されている。当史料は便宜上「米行録（憲政資料室本）」と呼称し、⑪とする。[18] これは、「航海日誌（仮名）」の写本であると推測される。[19]

「米行録」は内容より、『海軍歴史』（講談社版『勝海舟全集』では、第八巻の「海軍歴史Ⅰ」収録「海軍歴史　巻の七　咸臨艦米国渡航の上」「海軍歴史　巻の八　咸臨艦米国渡航の中」「海軍歴史　巻の九　咸臨艦米国渡航の下」）[20] の基になっている。当史料は⑫とする。

他には、海舟の後援者であった、伊勢商人の竹川竹斎[21]の子孫に伝わる「万延元申年勝麟太郎物部義邦君航海日記」という史料がある。これは、竹斎が社会に役立つ有為な人材を育成するために、嘉永七年（一八五四年）に私財をもって創設した私立図書館である射和文庫に現存する（現住建物により内部は非公開）。当史料は便宜上「米行録（射和文庫本）」と呼称し、⑬とする。海舟から竹斎に対して、どの様な形で当史料が伝わったのかは詳細が不明である。

この史料は「米行録」と内容が似通っている。しかし、「米行録（射和文庫本）」には一部欠落がある。[22] この欠落により、文章が途中から不自然に始まっている箇所が存在する。そのため、内容を一部省略したのではなく、何らかの理由で欠損してしまったことが推測される。

「米行録（射和文庫本）」には、竹川家に関連する情報が記載されている。「勝麟太郎物部義邦君の米利堅国に船出し給ふに贈」、「勝君の像に書をそへて給ひしことは」、七月一九日の日付入りの竹口信義宛海舟書簡、「万延元年申年勝氏航海日記ニ付亜国新聞紙　咸臨丸之条」である。「勝麟太郎物部義邦君の米利堅国に船出し給ふに贈」では、竹斎が海舟に贈った短歌が収録されている。「勝君の像に書をそへて給ひしことは」では、海舟がサンフランシスコで撮影した自身の写真の周囲に書簡を書いた贈物の翻刻が掲載されている。[23] 竹口信義は、竹川竹斎の弟で、竹斎と同じく海舟を支援した伊勢商人である。[24]「亜国新聞紙　咸臨丸之条」は、咸臨丸一行についてのアメリカの新聞記事を和訳したものである。[25]

「米行録（射和文庫写本）」は、紙焼き写真本とマイクロフィル

ムが国文学研究資料館に所蔵されている。この紙焼き写真本及びマイクロフィルムを便宜上「米行録（国文研本）」と呼称し、⑭とする。

「米行録（射和文庫本）」は、他にも写本が史料編纂所に「勝義邦航海日記」との名称で存在する。[26] この写本を、便宜上「米行録（射和文庫本系統 史料編纂所本）」と呼称し、⑮とする。[27] これには「竹川信太郎家文書」との説明があり、竹川信太郎は竹川竹斎の子孫である。

替わって、「米行録（射和文庫本）」の写本であるとの確証は無いのだが、「米行録（射和文庫本）」と同一の箇所が欠落している写本がある。東京海洋大学附属図書館所蔵の「米国航海紀行」である。[28] この史料を便宜上「米国航海紀行（海洋大本）」と呼称し、⑯とする。この写本には、「米行録（射和文庫本）」にある本文終了後に記載されている竹川家に関連する記述は記載されていない。しかし、この写本には他の写本では確認できない、「航海日記別録巻之一終」との文章が存在する。この文章は「米行録」が、「航海日誌（仮名）」と「米行録（早稲田大本）」の二冊を基として作成されたと推測した際の、「航海日誌（仮名）」箇所の巻末に記載されている。これでは、「航海日誌（仮名）」と推測される箇所の終わりに「別録巻之一終」と記述されていることになる。ここから、「航海日誌（仮名）」が「航海日記別録巻之一」と呼称されていた可能性が推測される。

名古屋市蓬左文庫には、尾張藩士大道寺家の用人である水野正信が残した、「資治雑笈」が所蔵されている。[29] この中に「万延元年亜国新聞紙 米国航海紀行（勝安芳） 加利福尼（カリフォルニヤ）新聞」が収録されている。[30] これは三つの史料群であり、この中の「米国航海紀行（勝安芳）」は、「米国航海紀行（海洋大本）」と同様の写本である。この史料を便宜上「米国航海紀行（蓬左文庫本）」と呼称し、⑰とする。[31] また、「万延元年亜国新聞紙」は、「万延元年申年勝氏航海日記ニ付亜国新聞紙 咸臨丸之条」と比べると途中で文章が終わっている。[32]

木村慎平「水野正信と「青窓紀聞」―幕末名古屋のソーシャル・ネットワーク」[33] によると、水野正信は、江戸詰めの尾張藩士である間瀬権右衛門と知人関係だった。水野は間瀬から海舟の情報を得ていた。[34] 万延元年（一八六〇年）六月二七日及び七月七日に、海舟は江戸の合羽坂付近に在住の間瀬を訪れている。その際、アメリカの事について話したが、海舟は「紀行書」を作成中であって、脱稿したら間瀬に渡す、とのことだった。[35] これが予定通りに進めば、「紀行書」は間瀬に海舟からの写本なりが渡され、間瀬を挟んで水野へ「紀行書」が渡った可能性がある。そうなると、この「紀行書」が「米国航海紀行（蓬左文庫本）」の基となったことになる。しかし、水野のもとにあった「米国航海紀行（蓬左文庫本）」は欠落があり、しかもその欠落は「米行録（射和文庫本）」及び「米国航海紀行（海洋大本）」のものと同一である。「米国航海紀行（海洋大本）」には「別録巻之一終」との記述もあるため、欠落のある数種の写本については、何が基で何が写しなのかは、断定するだけの材料が現在見つかっていない状況にある。

参考として、万延元年遣米使節の一員として、ポーハタン号にて渡米した飛騨の大庄屋の次男、飛騨郡代の公用人にして俳人の加藤素毛が紀行談を水野に語り、水野が記述した記録が「二夜語（ふたよがたり）」である。この「二夜語」には水野が附言を付けている。その内容は、文久元年（一八六一年）八月に加藤が水野の元を訪れて紀行談を語ったが、加藤の話は「勝麟子の筆記と悉く符合する」とある。[36]「勝麟子」とは勝麟太郎すなわち海舟のことであるため、文久元年八月には、水野はおそらく米国航海紀行（蓬左文庫本）」の基となった「勝麟子の筆記」を入手していたこととなる。

岡山県総合文化センター、現在の岡山県立図書館にも「米国航海紀行」との名称の写本が存在すると『国書総目録』に記載がある。岡山県立図書館に史料の照会を行ったところ、確かにかつては存在したが、アジア・太平洋戦争の際の岡山空襲にて焼失した模様であり、現存しないとの回答を得た。当史料は便宜上「米行録（岡山県総合文化センター旧蔵）」と呼称し、⑱とする。[37]

Ⅱ　「掌記　二」から『海軍歴史』までの系統図

海舟渡米記録諸本の系統を、「図　海舟渡米記録諸写本の系統図」を参考にして考察してみる。

海舟自筆の日記手帳であり、渡米について記されたのが「掌記　二」（勝海舟記念館所蔵）である。ここから写本「掌記　二（史料編纂所本）」「掌記　二（慶応大本）」が作成された。

「掌記　二」をもとに、内容を整理し増補した航海日記の「米行録」（勝家から一時期南葵文庫に所蔵が移り、勝家へ返却後、所在は現在不明）が作成される。その前に「米行録」の草稿として、前半部「航海日誌（仮名）」（存在は確認されていない）と、後半部「米行録（早稲田大本）」が作成されたと推測される。「航海日誌（仮名）」からは「米行録（憲政資料室本）」が写本として作成されたと推測される。また「米行録（早稲田大本）」は刊本『遣外使節日記纂輯第二』に収録された。一方「米行録（早稲田大本）」の写本と考えられる、「米行録（浅野文庫旧蔵）」は現存しない。

「米行録」の写本が「米行録（史料編纂所本）」と「米行録（慶応大本）」である。また「米行録」は、『海軍歴史』に大部分が収録された。

海舟の後援者である竹川竹斎の竹川家が所有する射和文庫には、「米行録（射和文庫本）」が伝来した。しかし、内容に欠落がある。ここから紙焼き写真本及びマイクロフィルム「米行録（国文研本）」、写本として「米行録（射和文庫本系統　史料編纂所本）」が作成された。

「米行録（射和文庫本）」と同じ欠落部分を持つ写本として、「米国航海紀行（海洋大本）」と「米国航海紀行（蓬左文庫本）」が存在する。しかし、この三種の欠落のある写本については、基となった写本はどれであったのかを判断するには現在到っていない。「米国航海紀行（岡山県総合文化センター旧蔵）」は現存しないため内容が確認できない。しかし、名前が同一であることか

ら、同じ欠落部分を持つ写本であったと考えられる。

Ⅲ 「掌記 二」の内容

「掌記 二」の前半部に当たる、咸臨丸の渡米航海準備及び航海中の箇所は、「米行録」や『海軍歴史』が作成された際には、その大部分が収録を見合わされた。理由としては、上司の木村喜毅[38]への批判を記述し、航海時には艦長として職務遂行できない程の体調不良を起こしていた。このような公表がはばかられる内容が含まれていたため、公的な記録物として作成された「米行録」や『海軍歴史』では削除されたと考えられる。

「掌記 二」の前半部の内容については、既に土居良三『幕臣勝麟太郎』[39]にて取り上げられている。渡米については苦難の連続であったことが記されている。アメリカ派遣の件について、軍艦奉行だった水野忠徳が異動になったため話が進まなくなった。その中で、派遣船が朝陽丸から観光丸に変更になった。海舟は水野の後任として軍艦奉行に就任した井上清直と面会して、励まされた。士官たちは命懸けの航海になるから階級や俸給を上げて欲しいと願い出た。対して海舟は渡米の機会を失ってはいけないと、士官たちを説得した。遂にアメリカ行きの命令は出された。海舟としては、自分は身分が船将ではないので思い通りに行かない。「我苦心為すことを奉行に十倍す」と、上司である軍艦奉行の木村喜毅の十倍は苦労している、といった内容の記述を残している。なお、士官の不満は治まったが、今度は観光丸から咸臨丸に派遣船を替えよとの命令が出たため、水夫たちがまた力作業をさせられると騒ぎ出した。海舟はハリスが余計な口出しをしたからだと憤慨している[40]。また、三度目の派遣船変更なので抗議を行なった。海舟は水夫たちの抗議については、一両日行方を眩ましし、木村から水夫に海舟が辞めるつもりだと話させ、水夫の情に訴える方法を採った。なお、水夫は手当が格段に増額されていた。これも水夫の不満対策と見られる。年明け、安政七年（一八六〇年）正月四日、士官たちの身分は与力上席に格上げされ、海舟も両番上席[41]に進んだ。木村の依頼で咸臨丸に同乗したアメリカ海軍大尉のブルックの意見で咸臨丸出帆は早まり、咸臨丸は急いで荷物を積んで出港した。

渡米の際は、「我十日前より風邪腹痛ありしが、出帆前多事なりしを以て病を養うの暇なく」と、出港までの無理が祟って海舟は風邪[42]を患い腹痛、発熱、下血といった体調不良を起し、重症となっていた。結局、ブルック以下の外国人乗組員に指揮権を委譲することとなった[43]。このような状況でうまくいったのは、中浜万次郎が通訳を行ったためである。中浜は土佐出身の漁師で、漂流した後アメリカに渡り教育を受け、航海士の経験も持ち、帰国後は幕臣に取り立てられ、咸臨丸乗組員の一員となった[44]。

サンフランシスコに就いた際には、入津時に掲げる将官旗について、木村は自分の家紋の旗を掲げようとした。これに対して、海舟は徳川将軍家の家紋旗を掲げようと発言した。結果、木村の意見が通った件について記載されている[45]。

以上、海舟の渡米航海時は、体調不良での航海を余儀なくされ

たことがわかる。元々海舟は船酔いする体質である。このことについては、共に蘭学を学んだ幕臣の岡田新五太郎宛に、長崎海軍伝習所での海軍伝習中に送った書簡に記録がある。安政三年（一八五六年）四月二五日付岡田宛海舟書簡には、「小子などは兎角船暈相発、くるしみ候事に御座候」と、海舟が頻繁に船暈（せんうん、すなわち船酔い）に苦しんでいるとの記述がある。[46] 海舟の渡米航海時について、木村喜毅の従者として咸臨丸に同乗した福沢諭吉の『福翁自伝』では、「勝麟太郎と云ふ人は、艦長木村の次に居て指揮官であるが、至極船に弱い人で航海中は病人同様自分の部屋の外に出ることは出来なかった」と記述されている。[47] 更に、渡米航海中の咸臨丸船中で海舟が「己（おれ）はこれから帰るから、バッテーラ〔ボート〕を卸してくれなどと、水夫に命じた」と木村喜毅が後年に語ってる。[48] この海舟の発言は、体質から来る船酔いの他に、腹痛、発熱、下血といった体調不良に加え、同乗したブルック大尉たちアメリカ人に指揮権委譲までする状況に陥った末の、錯乱による発言であったと考えられる。[49]

一方、「掌記　二」の後半部はサンフランシスコ紀行の文章となり、「米行記」や『海軍歴史』に収録されているものと内容はほぼ変わらない。しかし、「米行記」や『海軍歴史』には未収録及び形を変えて収録された箇所が存在する。現在「掌記　二」は使用できないため「掌記　二（史料編纂所本）」のコマ数を使って、『海軍歴史』の記述と異同の箇所を列挙する。参考として表一「「掌記　二」（「掌記　二（史料編纂所本）」）・『海軍歴史』咸臨丸　アメリカ到着以降の記述の異同」を作成した。

表一　「掌記　二」（「掌記　二（史料編纂所本）」）・『海軍歴史』咸臨丸アメリカ到着以降の記述の異同

	「掌記　二」（「掌記　二（史料編纂所本）」）	『海軍歴史』
「掌記　二（史料編纂所本）」五九コマ	「サンフランシスコ並其部落の略図」が記されている	該当する図はない
「掌記　二（史料編纂所本）」六五～六六コマ	海舟が森田清行と面会した記述がある	該当する記述はない
「掌記　二（史料編纂所本）」六八コマ	アメリカ人のカニンガムが負傷した件に関連して、「我邦人自から高位に居て尊大なるとは甚相違の事なりと独笑す」との記述がある	カニンガムについての記述はあるが、「我邦人～独笑す」に該当する記述はない
「掌記　二（史料編纂所本）」七〇～七一コマ	パナマ行きに関連して、木村喜毅を批判する記述がある	該当する記述はない
「掌記　二（史料編纂所本）」一一九～一二一コマ	「咸臨艦乗組」の名簿が記述されている	「第四条乗員の人名」が該当する

出典　勝海舟全集刊行会編『勝海舟全集』講談社、一九七二～一九九四年

五九コマには、「サンフランシスコ並其部落の略図」が記されている。

六五～六六コマには、

（三月）九日我使節を乗せたるポーハタン船サンフランシスコ江入津の風説あり

午後爰に来る夕刻同船江行く、我邦人皆壮健、森田生へ面会、航海以来の事を話し胸裏の鬱を散す

とある。なお「森田生」とは森田清行が該当する。森田は勘定組頭として、ポーハタン号に乗船した万延元年遣米使節において正使新見正興、副使村垣範正、目付小栗忠順に次ぐ第四位の重職として渡米している。[50] 森田の記録「亜行日記」でも、三月九日の条にて木村喜毅と共に海舟が森田とサンフランシスコで面会し、無事を確認し合ったことが記されている。[51]

六八コマには、咸臨丸を修理したメア・アイランドのカニンガム長官が、ポーハタン号の祝砲の際に負傷した件について記述がある。負傷しながらも動揺した様子のなかったカニンガムを褒め称えた後、「掌記　二（史料編纂所本）」では「我邦人自から高位に居て尊大なるとは甚相違の事なりと独笑す」と締めている。[52]

七〇～七一コマには

（閏三月）十四日同断（滞泊）

此地江滞留預め三日とおもひしか、パナマ之便近きにあるといふ説あり、これにて我使節の便宜知れへくといふを以て、又爰に滞泊すること三日を延ふ、然らされは帰後政府江詞なしといふ説による、我初めポーハタン出船の時議爰に及び必らすパナマ江航これ等の便宜を得て帰航せんとい、しに、奉行帰念頻り起り此議不被行、今又爰に到つて此便宜を聞かんといふは何そや

とある。この記述は、海舟はパナマへ行こうとしたのに対し、奉行が帰国したいと希望したから行けなかったとの内容であり、奉行すなわち木村喜毅を批判する文章である。

一一九～一二一コマは、「咸臨艦乗組」の名簿が記述されている。『海軍歴史』では、「第四条乗員の人名」が該当する。『海軍歴史』では収録されていない、長崎海軍伝習所の伝習生である杉浦金次郎の名が当史料には収録されている。しかし、実際に咸臨丸乗組員だった岡田井蔵の名が収録されていないといった異同が見受けられる。

略図や名簿以外は、海舟の個人的な批判や不満を記した記述である。そのためこれらの記述も『海軍歴史』作成に至るまでに削除されたと考えられる。

Ⅳ　海舟渡米記録諸本の内容比較

海舟の渡米記録の種類を概説すると、主に四つに分けることができる。A・B・B'・Cと分けるが、これらは「図　海舟渡米記録諸写本の系統図」の各史料に付けている。

海舟自筆の日記手帳であり、渡米について記された「掌記　二」と、写本である「掌記　二（史料編纂所本）」「掌記　二（慶応大本）」をAとする。

「掌記　二」を基に作成された「米行録」と、写本である「米行録（史料編纂所本）」「米行録（慶応大本）」をBとする。なお、「米行録」の草稿と考えられる「航海日誌（仮名）」「米行録（早稲田大本）」（刊本も含む）と、「米行録（早稲田大本）」の写本と考えられる「米行録（浅野文庫旧蔵）」は、分類上はBに相当する。

「米行録（射和文庫本）」（紙焼き写真本及びマイクロフィルム「「米行録（国文研本）」も含む）や、「米国航海紀行（蓬左文庫本）」「米国航海紀行（海洋大本）」、そしておそらく「米国航海紀行（岡山県総合文化センター旧蔵）」は、「米行録」の一部が欠落している写本であるといえる。そのため、′Bとする。

「米行録」は、『海軍歴史』に大部分が収録されたが、増補版といえるものとなっているため、『海軍歴史』をCとする。

これらA、B、′B、Cの関係は、派生上A→B→Cとなる。
　　↳′B

海舟渡米記録諸本の内容比較について、参考として表二「海舟渡米記録諸本の内容比較表」を作成した。

表二より検討すると、まず咸臨丸の渡米航海準備などについては、A（「掌記　二」など）においては、士官や水夫が不満を持っていた件についてなどが記されている。また海舟が上司である木村喜毅の十倍は苦労している、といった個人的な内容の記述がある。これらはB以降には収録されていない。B（「米行録」など）においては、Aと比較して、海舟の個人的な記事や、揉め事関係の記事は使用艦を咸臨丸に変更した件以外は削除されている。′B（「米行録（射和文庫本）」など）においては、Bと基本的に同一である。

咸臨丸の渡米航海中については、Aにおいては海舟が体調不良を起し、艦長としての職務が成り立たなかった件など、揉め事の連続であったことが記されている。これらについてはB以降には収録されていない。Bにおいては、晴天が五、六日しかなかったなど、気象関係の記述にほぼ終始している。揉め事関係についてはほとんどが削除されているため、全体に比例して文章量が極端に少ない。′Bにおいては、航海準備などと同じくBと基本的に同一である。

サンフランシスコ到着後の、アメリカ紀行などについては、Aにおいては内容の大部分がB以降にも収録されている。Bにおいては、Aの増補版と扱うことができる。′Bにおいては、Bと基本的に同一だが、一部に欠落がある。中途半端な文章から再開されるため、何らかの理由での欠落と見做せる。[53]

そして、C（『海軍歴史』）においては、全般的にBの増補改訂版と扱うことができる。

Aの特徴としては、海舟渡米記録の原形となった手記である。その分、公表が憚られる内容もあり、それらはB以降では削除されている。

Bの特徴としては、Aから公表が憚られる内容を削除して、増補を行なった航海日記である。幕府に対する復命書もしくは復命書に添付する資料として作成された可能性がある。

′Bの特徴としては、Bと基本的に同一であるが、一部に欠落

表二 海舟渡米記録諸本の内容比較表

<table>
<tr><th></th><th>A（「掌記 二」など）</th><th>B（「米行録」など）</th><th>B’（「米行録（射和文庫写本）」など）</th><th>C（『海軍歴史』）</th><th>評価</th></tr>
<tr><td>航海準備など</td><td>士官や水夫が不満を持っていた件についてなどが記されている。また海舟が上司である木村喜毅の十倍は苦労している、といった個人的な内容の記述がある。これらはB以降には収録されていない</td><td>Aと比較して、海舟の個人的な記事や、揉め事関係の記事は使用艦を咸臨丸に変更した件以外は削除されている</td><td rowspan="2">Bと基本的に同一</td><td rowspan="3">Bの増補改訂版と扱うことができる</td><td rowspan="3">Cが完成形ではあるが、海舟の渡米とアメリカ体験を論ずる際は、Cからは削除されたAの箇所を含めて論ずる必要がある</td></tr>
<tr><td>航海中など</td><td>海舟が体調不良を起し、艦長としての職務が成り立たなかった件など、揉め事の連続であったことが記されている。これらについてはB以降には収録されていない</td><td>晴天が五、六日しかなかったなど、気象関係の記述にほぼ終始している。揉め事関係についてはほとんどが削除されているため、全体に比例して文章量が極端に少ない</td></tr>
<tr><td>アメリカ紀行など</td><td>内容の大部分がB以降にも収録されている</td><td>Aの増補版と扱うことができる</td><td>Bと基本的に同一だが、一部欠落あり。中途半端な文章から再開されるため、何らかの理由での欠落と見做せる</td></tr>
<tr><td>特徴</td><td>海舟渡米記録の原形となった手記である。その分、公表が憚られる内容もあり、それらはB以降では削除されている</td><td>Aから公表が憚られる内容を削除して、増補を行なった航海日記である。幕府に対する復命書もしくは復命書に添付する資料として作成された可能性がある</td><td>Bと基本的に同一であるが、一部に欠落がある。欠落部分までが同じである写本が複数冊存在する</td><td>Bの増補改訂版と扱うことができ、完成形といえるものとなっている</td><td></td></tr>
</table>

出典 勝海舟全集刊行会編『勝海舟全集』講談社、一九七二～一九九四年

がある。欠落部分までが同じである写本が複数冊存在する

Cの特徴としては、Bの増補改訂版と扱うことができ、完成形といえるものとなっている。

以上の考察より、海舟渡米記録の完成形がCといえる。しかし、AにはCに至るまでに削除された、海舟の渡米前及び航海中の個人的な記述が残っている。そのため、海舟の渡米とアメリカ体験を論じるには、Cすなわち『海軍歴史』を主要な史料として、Aすなわち「掌記　二」（もしくは「掌記　二（史料編纂所本）」「掌記　二（慶応大本）」）を補完のための史料として使用するべきである。

おわりに

現在確認できる限りの、二〇種近く存在する海舟の渡米記録の諸写本全てを比較検討して、その変遷を考察した。結果として、それらの写本の系統を解明することができた。これらはA・B・B'・Cの四つに分けることができる。Aは海舟自筆の日記手帳の「掌記　二」とその写本となる。Bは「掌記　二」を基に作成された「米行録」と、その他には「米行録」と内容がほぼ同じとなる写本及び草稿などが該当する。B'は「米行録」の写本ではあるが、一部が欠落しているものが該当する。そしてCは「米行録」の増補版といえる『海軍歴史』である。この四つについては、B'はBとほぼ同じものであり、AからBが、BからCがそれぞれ増補改訂版として作成されている。そのため海舟渡米記録の完成形がC『海軍歴史』となる。しかし、A「掌記　二」には海舟の渡米前及び航海中の個人的な記述が存在する。

検討の結果、講談社版『勝海舟全集』別巻「文書・著述・文献一覧」の「海軍歴史」の項目に記載されている内容を具体的に実証し、また「掌記　二」についての根拠を立証した。各種写本の内容は、『海軍歴史』に収斂された形となる。『海軍歴史』に到達するまでの海舟渡米記録の変遷を検討したことによって、海舟渡米記録を史料として使用する際は『海軍歴史』を中心に使用し、収斂されるまでに削除された、渡米前及び航海中の詳細については「掌記　二」を使用するべきであることが立証された。

以上のような諸写本の分析により、海舟の思想や行動についても、より厳密な実証に基づく検討が可能になる。例えば、海舟が太平洋往復の際に復路で立ち寄った、ハワイの他国従属状態から見る、海舟の国防思想についての考察があげられる。このような、『海軍歴史』を使用する考察においては、海舟の多様な渡米記録の成り立ちを検討した、本論考の作業を踏まえて行う必要があるといえる。[34]

ところで、諸写本に付記された史料のなかでも注目すべき史料は、「米行録（射和文庫本）」に付記として記載された、海舟と竹川竹斎の書簡などの遣り取りの記録である。これらの史料は、海舟とその後援者であった竹斎との交流について、具体的に知るために重要なものといえる。

本論考作成において得た知見は、「掌記　二」の写本は「掌記　二（史料編纂所本）」と「掌記　二（慶応大学）」の二冊のみが

現在確認されていることである。この冊数は「米行録」のそれと比較すると数が少ない。そして「掌記　二（慶応大学）」は校了が大正九年（一九二〇年）八月二十一日、「掌記　二（史料編纂所本）」は校正が大正十五年三月六日と、各本の巻末に記載されている。そのため、「掌記　二」の写本は二冊とも、海舟の没後に作成されたことがわかった。理由としては、海舟の私的な手帳である「掌記　二」には、咸臨丸渡米について公開するのは憚られる内容が記載されていることがあげられる。海舟は「掌記　二」の中で、咸臨丸の指揮権を外国人乗組員に委譲することとなった際に、「速に死せんにはと思慮」[56]したと記述している。こういった心境から、海舟は航海中に帰るからボートを下ろせと錯乱したものと考えられる。このような内容が記載されているため、生前の海舟は「掌記　二」を公表することはなく、海舟没後になってからその存在が知られるようになったと考えられる。

「掌記　二」が秘匿された史料であるとして、対して「米行録」は公開するために作成したものといえるため、写本は多く作成されている。これら写本のなかに欠落のある，Bに分類される写本が存在することは、本論考で初めて明らかになった。しかし，Bが何故欠落本となったのか、また同一の箇所が欠落した写本が複数冊作成された経緯の解明については、今後の課題となった。欠落箇所が同一であるため、基になった欠落写本が存在すると考えられるのだが、それが何であるのかについては、現在断定するだけの材料がない。このような分析を行うことは、写本が作成される際の系統を確認する上で重要であるといえるため、継続して研究したい。

（付記）本稿は、東洋大学の井上円了記念研究助成、及び東洋大学校友会奨学金による成果の一部である。

本稿作成に当っては、射和文庫（三重県松阪市射和町）の竹川裕久氏。岡山県立図書館郷土資料班の隈元恒氏。酒田市立光丘文庫文庫長の阿部博氏、及び資料調査員柏倉由紀子氏。名古屋市蓬左文庫の酒井喜代枝氏。広島市立中央図書館広島資料室の井上藍氏、他多くの方々の御協力を得ました。ここに御礼申し上げます。

註

（1）勝海舟全集刊行会編『勝海舟全集』講談社、一九七二～一九九四年。以下、講談社版『勝海舟全集』と表記する。

（2）講談社版『勝海舟全集』別巻、一〇七八頁。

（3）『科学医学資料研究』八五・八六・一二〇、野間科学医学研究資料館、一九八一・一九八四年。

（4）「掌記　一」も存在しており、「掌記　一」は勝部真長編『海舟余録「掌記」・「詠草」を読む』ＰＨＰ研究所、一九九六年（以下『海舟余録』）で使用された史料である。「掌記　一」の「内容は、海舟のメモ帳、それも主として読書ノートといったものである。その読書と対象は、主に和歌と漢詩に集中している」（『海舟余録』一二頁）。史料自体は江戸東京博物館に所蔵されている（「江戸東京博物館所蔵　勝海舟関係文書　マイクロフィルム版目録」）。

（5）安高啓明全体監修、大田区立勝海舟記念館編『勝海舟　勝海舟記念

館図録』大田区立勝海舟記念館、二〇一九年、五・五二～五三頁。

（6）当史料は史料編纂所データベースでネット公開されている。https://clioimg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/list/idata/T16/II_230ho_/522-4/?m=limit 二〇二二年一〇月一九日閲覧。

（7）この写本を作成した人物は、羽柴雄輔と写本末尾に記載されている。羽柴は、かつての慶応大学図書館職員である。

（8）文倉平次郎『幕末軍艦咸臨丸』巌松堂、一九三八年、四八九頁。

（9）当史料は史料編纂所データベースでネット公開されている。https://clioimg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/list/idata/T16/II_230ho_/522-6/?m=limit 二〇二二年一〇月一九日閲覧。なお、史料編纂所データベースの検索では、「勝海舟米行録」は「勝海舟米航録」と表記されている。

（10）この写本の作成者は、新居鉄太郎であると写本の末尾に記録されている。しかし、新居については現在不明である。

（11）関廣好氏の指摘による。

（12）「義邦先生航海日誌別録」は早稲田大学の古典籍総合データベースでネット公開されている。https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he10/he10_02285/index.html 二〇二二年一〇月一九日閲覧。

（13）東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編『勝海舟関係資料　海舟日記』一、東京都江戸東京博物館、二〇〇二年、一三頁。

（14）「米行録（早稲田大本）」については、日米修好通商百年記念行事運営会編『万延元年遣米使節史料集成』全七巻、風間書房、一九六〇～一九六一年の第七巻二三八頁によると、大正七年（一九一八年）一月、富士川游（医学者、医史学者）氏所蔵のものを早稲田大学が金二〇円で購入したものであり、「米行録」の後半に当たると記述されている。

（15）大塚武松編『遣外使節日記纂輯第二』日本史籍協会、一九二九年。この書籍は、国立国会図書館デジタルコレクションでネット公開されている。https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1920509/37?tocOpened=1 二〇二二年一〇月一九日閲覧。

（16）『国書総目録』は、新日本古典籍総合データベースにてネット閲覧が可能である。https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/kokusho.html 二〇二二年一〇月一九日閲覧。

（17）東京大学史料編纂所には、「海舟先生事蹟資料展覧会出品目録」という史料が所蔵されている。この目録は、大正一四年（一九二五年）一一月に行われた展覧会の目録と考えられるのだが、「海舟先生米航日記　勝精所蔵」「海舟先生米航録　勝精所蔵」「海舟先生米航別録　早稲田大学図書館所蔵」との記録がある。この三冊についての記録からも、元々「米行録」は「掌記　二」を基にして、「航海日誌（仮名）」と別録との二冊組で作成したものと考えられる。

（18）「勝氏米行紀事」は国立国会図書館デジタルコレクションでネット公開されている。https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11221916 二〇二二年一〇月一九日閲覧。

（19）「米行録」の前半部に当る「米行録（憲政資料室本）」と、後半部に当る「米行録（早稲田大本）」の境界箇所は、一例として「米行録（史料編纂所本）」では九一コマと九二コマの間に相当する。この箇所では、九一コマは多くの余白を残して九二コマに改頁されている。また、「米行録（慶応大本）」の同じ箇所も同様に改頁が行われている。このことは、元々「米行録」が前後編で作成されており、そのための改頁であると考えられる。

（20）海舟の全集は以下の三種がある。

・海舟全集刊行会編『海舟全集』改造社、一九二七～一九二九年。

・講談社版『勝海舟全集』。

・勝部真長、松本三之介、大口勇次郎編『勝海舟全集』勁草書房、一九七二～一九八二年（以下、勁草書房版『勝海舟全集』）。
東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編『勝海舟関係資料　文書の部』東京都歴史文化財団、二〇〇一年の解説によると、全集「三者の中では、講談社版が長い年数を費やして、自筆原本のような確実な底本をできるだけ博捜して翻刻する努力をしており、これが現段階での到達点ということはできる」とある。そのため、本稿では講談社版『勝海舟全集』を『海軍歴史』の引用に使用する。

(21) 竹川竹斎についての書籍としては、三重縣飯南郡教育会編『竹川竹斎翁』三重縣飯南郡教育会、一九一五年、松阪市文化財保護委員会編『竹川竹斎』竹川竹斎翁百年祭実行委員会、一九八一年、上野利三『幕末維新期伊勢商人の文化史的研究』多賀出版、二〇〇一年などがある。

(22) 具体的には「米行録（史料編纂所本）」の一二九コマの途中から一五五コマの途中までが該当する。

(23) この短歌や書簡は三重県飯南郡教育会編『竹川竹斎翁』三重県飯南郡教育会、一九一五年に収録されている。

(24) 竹口信義に関する書籍としては、中井良宏、竹口作兵衛監修、上野利三、高倉一紀編『伊勢商人竹口家の研究』和泉書院、一九九九年がある。なお、七月一九日の日付入り竹口信義宛海舟書簡は講談社版『勝海舟全集』別巻、六〇八頁に収録されている。

(25) この訳文は『海軍歴史』「巻の九咸臨艦米国渡航の下」内の、「第十八条新聞紙抄訳、数則」に収録されている。しかし、所々に違いが見られるので、翻訳者が別人であると考えられる。

(26) 当史料は史料編纂所データベースでネット公開されている。https://clioimg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/list/idata/T16/II_230ho_/261/?m=limit二〇二二年一〇月一九日閲覧。

(27) この史料は名称が複数あり、表題には「勝義邦航海日記（万延元年）全（竹川信太郎家文書）」、内題には「勝氏航海日記　全」とある。更に中表紙はもう一枚あり、その内題には「万延元申年勝麟太郎物部義邦君航海日記」とある。

(28) この写本は、新日本古典籍総合データベースでネット閲覧が可能である。なお、「米国航海紀行」の表記には「国」「國」の表記揺れがあるため、本稿では「国」で統一する。

(29) 水野正信については、岩下哲典『江戸の海外情報ネットワーク』吉川弘文館、二〇〇六年、一〇三～一〇九頁に、水野がどのようにして情報収集及び分析を行っていたかについての記載がある。

(30) 「加利福尼新聞」は、ポーハタン号に乗船した万延元年遣米使節団に関する記事である。

(31) 「万延元年亜国新聞紙」は、「米行録（射和文庫本系統　史料編纂所本）」に収録された、「万延元年申年勝氏航海日記ニ付亜国新聞紙咸臨丸之条」と元の新聞記事は同じものである。しかし、所々に違いが見られるので、『海軍歴史』収録訳文と同じように、翻訳者が別人であると考えられる。

(32) 抜けている箇所は、「万延元年申年勝氏航海日記ニ付亜国新聞紙咸臨丸之条」から引用すると、「又日本ノキヤプタンハ立派ナル勇々敷キ姿ニシテ」と、海舟について紹介される文章が始まる箇所からである。

(33) 木村慎平「水野正信と「青窓紀聞」―幕末名古屋のソーシャル・ネットワーク」（羽賀祥二、名古屋市蓬左文庫編著『名古屋と明治維新』風媒社、二〇一八年に収録）の一七八～一七九頁。

(34) 海舟と間瀬の交流については、土井康弘「尾張藩士間瀬権右衛門が勝海舟から入手した情報」『一滴』第一一号、津山洋学資料館、二〇〇三年（以下、土井「尾張藩士間瀬権右衛門が勝海舟から入手し

た情報」と表記）に詳細がある。なおこの論考は、『一滴』第一二号、津山洋学資料館、二〇〇四年に注と文献・資料編が掲載されている。

(35) 土井「尾張藩士間瀬権右衛門が勝海舟から入手した情報」八頁。

(36) 『万延元年遣米使節史料集成』第三巻、五頁。

(37) 他には、酒田市立光丘文庫には、「航米紀聞」「勝麟太郎殿一件秘書」との題名の史料が所蔵されている。同文庫に内容を照会したところ、両書共に「掌記　二」などの海舟の残した記録とは内容が違う史料であるとの回答を得た。

(38) 『海軍歴史』の実際の制作においては、木村喜毅の協力が大きい。松浦玲『勝海舟』筑摩書房、二〇一〇年、六七〇頁。

(39) 土居良三『幕臣勝麟太郎』文芸春秋、一九九五年の第五章咸臨丸に乗組むまで、第六章咸臨丸の航海を参考とした。なお、『幕臣勝麟太郎』では「勝義邦航米日記」を使用しているが、「掌記　二」「掌記二　航海日記」については使用されていない。

(40) 実際に派遣船を変更させたのは、木村の依頼で咸臨丸に同乗したアメリカ海軍大尉のブルックである。

(41) 両番とは将軍外出時の護衛などの任にあたる、書院番と小姓組のことである。

(42) 海舟が罹患した病気の名称は詳細不明である。

(43) 指揮権委譲についてはブルックの日記にも記録がある。船の指揮権の件については『万延元年遣米使節史料集成』第五巻、和訳箇所一〇八～一〇九頁に記載されている。

(44) 中浜万次郎の伝記としては、中濱博『中濱万次郎　「アメリカ」を初めて伝えた日本人』冨山房インターナショナル、二〇〇五年、中濱京『ジョン万次郎　日米両国の友好の原点』冨山房インターナショナル、二〇一四年や、中濱武彦『ジョン万次郎の羅針盤』冨山房インターナショナル、二〇二〇年などがある。また論考としては、岩下哲典「アメリカより帰国した漂流民中浜万次郎への期待と待遇の変化について　近世日本社会の異文化受容者への眼差しとホスピタリティ」『Journal of hospitality and tourism』一巻一号、明海大学、二〇〇五年などがある。

(45) 土居によると、「そもそも乗ってもいない将軍の旗をあげるというのは筋が通らない」という（『幕臣勝麟太郎』二七九頁）。

(46) 講談社版『勝海舟全集』第二巻、三三頁。また、この岡田宛海舟書簡には、「算術には困却いたし申候。（中略）算術手に入り候へば、航海は左のみ六ヶ敷は無御座候と存候」と、算術さえできれば航海は難しくはないのに、との海舟の心情が吐露されている記述がある。この船酔い体質に加えて、航海関係の算術が苦手であることが、海舟が航海を得意とはいえない技量であった要因と考えられる。

(47) 福沢諭吉述、矢野由次郎記『福翁自伝』時事新報社、一八九九年、一八二頁。なお読点は和田が付けたものである。

(48) 勝海舟述、巌本善治編、勝部真長校注『新訂　海舟座談』岩波書店、一九八三年、二四五頁。

(49) 海舟は、明治六年（一八七三年）にブルックと再会している。『海舟日記』明治六年一〇月九日条に、「米国ブロックス来訪、忽然出会夢中之如し」とある。そして翌日の一〇月一〇日条には「ブロックスを訪ふ」とある。この「ブロックス」がブルックのことであり、海舟は再会したブルックを翌日自ら訪ねている（東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編『勝海舟関係資料　海舟日記』六、東京都江戸東京博物館、二〇一七年、九三～九四頁）。この行動からは、海舟はブルックに対して、アメリカへの航海を成功させてくれた恩人と捉えていた、と考えることができる。

(50) 森田清行の詳細については、『万延元年遣米使節史料集成』第一巻の解題に記載がある。

(51) 『万延元年遣米使節史料集成』第一巻、四六頁。

(52) カニンガムについては、土居良三『咸臨丸海を渡る』未来社、一九九二年（使用したのは一九九八年刊の中公文庫版）二八七～二九二頁を参考とした。カニンガムは、ブルックへ宛てた書簡で自分のことを「司令官」と呼称している。しかし、「掌記　二（史料編纂所本）」では「コモドールカネガム」と記述されている。コモドールすなわちコモドアとは、英語表記ではCommodoreであり、現代では准将や提督と翻訳される。また、『海軍歴史』では「当地之総督カネガム」と、「総督」と呼称されている。このことから、『海軍歴史』編纂当時においても外国軍人の表記が定まらず混乱していたことがうかがえる。

(53) Bにあって，Bにない箇所は、Cで『海軍歴史』「巻の九咸臨艦米国渡航の下」内の、「第九条同国（オランダを指している）海員俸銭表」が該当する。この箇所が不要と判断したため削除したのかとも想定してみたが、その前に「第六条同職（アメリカ海軍を指している）俸表」として、アメリカ海軍の給料表が収録されている。アメリカ海軍の給料表は残して、オランダ海軍の給料表を省くのは内容的におかしい。しかも、「第十条米国測量船の派遣」の大半も欠落し、「に到らしむ」と中途半端な文章から再開される。これは意図的な削除ではなく、事故か何かでの欠落と見做せる。

(54) 『海軍歴史』と「掌記　二」（「掌記　二（史料編纂所本）」「掌記　二（慶応大本）」）を用いて、当時期の海舟の行動・思想について別稿を構想している。

(55) 「掌記　二（史料編纂所本）」三九コマに記載がある。

＊ 人間科学総合研究所院生研究員・東洋大学大学院文学研究科史学専攻

【Abstract】

Several different records of Katsu Kaishū's 1860 trip to America

Tsutomu WADA*

There are varied records about Katsu Kaishū when he went to America. One of those is his notebook, known as "Shoki II", that describes his trip to the United States. The contents suggests that *Beikoroku* was created by organizing and enlarging the contents. The enlarged and revised version of these records is known as the 1889 "Kaigun Rekisi". The "Kaigun Rekisi" offers a complete record of Kaishū's visit to the United States. However, Kaishū's personal description remains in his "Shoki II" and was deleted before the "Kaigun Rekisi" was completed. As a result of comparing the records of Kaishū's visit to the United States, it was found that the important ones were "Kaigun Rekisi" and "Shoki II".
Key words : Katsu Kaishū, Asakura, Japanese historical visits to the United States, "Shoki II", "Beikoroku", "Kaigun Rekisi"

勝海舟の渡米の際の記録は、『海軍歴史』の一部として収録されている。その基礎となった海舟の記録は数種類存在するが、現在の所それらをまとめた研究が存在しない。そのため『海軍歴史』に収録されるまでの、海舟の渡米記録諸本について解説する。

海舟自筆の日記手帳であり、渡米について記されたのが「掌記　二」である。「掌記　二」を基に、内容を整理し増補した「米行録」が作成されたと考えられる。「米行録」の増補改訂版が『海軍歴史』と扱うことができる。

海舟渡米記録の完成形が『海軍歴史』といえる。しかし、「掌記　二」には『海軍歴史』作成に至るまでに削除された、海舟の渡米前及び航海中の個人的な記述が残っている。

二〇種近く存在する、海舟の渡米記録の諸写本を比較検討して、その変遷を調査した。結果、これらの諸写本においては『海軍歴史』と、「掌記　二」が重要であると判明した。
キーワード：勝海舟、渡米記録、「掌記　二」、「米行録」、『海軍歴史』

＊ A graduate student research fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University